

## 「記憶の未来化」

—ヴェリナ・ハス・ヒューストンの戦争花嫁劇—

平石(稲木) 妙子

### 1. 記憶の時代における「戦争花嫁」

近年のアジア系アメリカ文学において、太平洋戦争や朝鮮戦争、ベトナム戦争などアメリカとアジアとの戦争を、記憶として語る新たな物語が次々と生み出され、過去の歴史の語り直しが盛んに行われている。特に「記憶の時代」とも呼ばれた1990年代以後、過去の戦争を巡るナショナル・メモリーやパブリック・メモリーを相対化し、脱構築する試みがなされ、アメリカとアジアとの戦争の再定義も活発に行われるようになった。韓国系のノラ・オッジャ・ケラーの『慰安婦』(*Comfort Woman*, 1999) や、ベトナム系のアンドリュウ・ラムによる『ナマズとマンダラ』(*Catfish and Mandala*, 2000) などは、その代表的な例であろう。これらのテキストは、支配的な過去の認識として受容されてきた公式の歴史によって消去されたアメリカとアジアの戦争に対する文化的記憶が存在していることを示した。このようにアメリカとアジアとの戦争を語り直す試みを、アジア系アメリカ演劇において繰り返し試みてきたのが、ヴェリナ・ハス・ヒューストンである。ヒューストンは、『朝がきました』(*Asa Ga Kimashita*, 1984)、『アメリカの夢』(*American Dreams*, 1984)、『ティー』(*Tea*, 1986) の三部作において、第二次大戦後の占領期に、アメリカ人兵士と結婚し、「戦争花嫁」と呼ばれた人々の歴史を語り直した。従来のアジア系移民女性史において、空白のままであった戦争花嫁の歴史を可視化し、家父長制や帝国主義のもとで客体化されてきた戦争花嫁に対する従来のネガティブなステレオタイプ像に対抗して、新たな戦争花嫁像を提示したのである。<sup>1</sup>

三部作は、ヒューストンの母であるセツコ・タケチをモデルに書かれたものである。一作目では、戦後の混乱期におけるセツコ・シマダと占領軍のアフリカ系兵士であるクリード・パンクスとの出会いや、戦後のセツコ一家の変化がセツコの故郷である松山を舞台に描かれている。また、二作目以後は、アメリカに舞台が移り、1950年代の半ばにアメリカに渡ったセツコの状況が時代を追って描かれている。80年代に入って、ヒューストンが戦争花嫁であった母の記憶を語り直そうとした契機にはどのような思いがあったのだろうか。ヒューストンにとって、母の歴史的体験を辿ることは、個人的な試みであるとともに、「政治的な」企てでもあったという (Uno, 155)。母の歴史を単に個人史としてのみ捉

えるのではなく、ベティ・リアドンが論じたように他者支配と排除の論理に基づく「戦争システム」によって生み出された家父長制や帝国主義、及び人種主義との相克を提示することで、現在の日本やアメリカ社会を問い直す視座を提示することが三部作におけるヒューストンの試みの中心にあったことが、この言葉を通して示唆されている。換言すれば戦争花嫁の歴史を語り直すことは、ヒューストンにとって、過去を掘り起こすだけではなく、現在を捉え直す契機でもあったのだ。

これまでの戦争の記憶をめぐる様々な論争が示すように、過去の記憶を語り直す際に問われるのは、その記憶がどのようなかたちで、誰のために、何のために想起されるかという問題である。ヨネヤマ・リサは、ベンヤミンやハーバーマスに依拠しつつ、過去を掘り起こす作業が現在を批判的に問い直し、新しい未来を創造する試みへとつながるものでなければならないと「記憶の未来化について」と題された論文において論じている（ヨネヤマ、1998、231-248）。<sup>3</sup> 過去を可視化することは、現存する言説と表象を超越したものではありえず、「既存の知の秩序に回収されてしまう危険をつねにはらんでいる」（245）からである。ヒューストンが戦争花嫁の歴史を語り直そうとしたのも、日系でもなくアジア系でもない「アメレージアン」と自身を規定するヒューストンの雑種性、混血性と関連づけて捉えられるべきであろう。ネイディヴ・アメリカンとアフリカ系の血をひく父親と日本人の母親との間に生まれたヒューストンは、「アメレージアン」を「アジア人でもなければアメリカ人でもなくその両方であり、真の意味で多人種的、多文化的存在である」と定義している（Houston, 1991, 54）。そして、アメレージアンとしての自身のポジションを「抵抗とエンパワメントの場」（Houston, 1997, xi）として捉え、アメレージアンがアメリカの人種的、社会的境界を揺すぶり、攪乱する存在であることを示唆する。このような複数の人種と文化を横断するアメレージアンとしての複眼的な位置から、ヒューストンは戦争花嫁の歴史を語ることを試みたのである。

本稿では、三部作のなかでも、戦争花嫁のアメリカへの入国がピークに達した 50 年代半ばから 60 年代にかけてのアメリカを舞台にした『アメリカの夢』（1984）と『ティー』（1987）を取り上げて、ヒューストンが戦争花嫁の記憶をどのように、また、何のために想起したのかという問題を、先の論文でヨネヤマ・リサが使用した「記憶の未来化」という言葉を手掛かりにして探り、ヒューストンの戦争花嫁劇の再評価を試みる。

## 2. アメリカの夢／夢のアメリカ

先に述べたように、「戦争花嫁」とは、占領期の日本に駐留していたアメリカ人兵士・軍属と結婚して、アメリカに移住した日本人女性を指すものである。アメリカでは、1924 年の移民法により、日本人女性の入国が禁止されたことや、異人種間結婚が禁止されていることを理由に、占領軍は当初、アメリカ人兵士と日本人女性との結婚には否定的であっ

た。しかし、1947年に制定された日本人花嫁法、及び1950年の公法717によって日本人戦争花嫁のアメリカへの入国が正式に認められるようになった。戦後、太平洋を渡った戦争花嫁の数については、およそ5万人ほどであったとされている。ヒューストンの『アメリカの夢』では、1955年のニューヨークを舞台に、セツコが様々な困難に出会いながらも新たな出発をしようとする様子が描かれている。

劇は、クリードの弟マンフレッド夫妻のアパートで新生活の準備をするセツコ夫妻の様子を中心に展開される二幕で構成されている。この劇で注目すべき点は、他の二作と異なり、セツコが主演として描かれ、50年代半ばのアメリカ社会におけるセツコの状況を前景化することで、従来のアメリカでの戦争花嫁言説に対抗しようとしたものである。<sup>3</sup>以下、『アメリカの夢』におけるセツコの闘いに焦点をあてて、再読を試みる。

『アメリカの夢』において注目すべき点は、ヒューストンが1950年代のアフリカ系アメリカ人コミュニティとの関係において戦争花嫁を描いている点である。ポール・R・スピカードによると、総じてアフリカ系アメリカ人は、戦争花嫁に対する同情から、自分たちのコミュニティに日本人戦争花嫁を好意的に迎え入れたという (Spickard, 143)。しかし、『アメリカの夢』を読むと、アフリカ系の日本人花嫁に対する対応は、必ずしも好意的なものではなく、1950年代のアメリカ社会におけるアフリカ系の状況とも相俟って、複雑な要素を帯びたものであったことがわかる。それを最も端的に示すのが、セツコに対するマンフレッドとその妻フレディの差別的対応である。マンフレッドは、アメリカ人が戦後もなおパール・ハーバーを忘れておらず、「日本人は皆、国に送還されるべきだと思っている」 (*American Dreams*, 23) と説明して、アメリカに到着したばかりのセツコに日本への帰国を暗に求める。また、「ジャップ」という差別語を繰り返し用いて、「ゲイシャ」や「チャイナ・ドール」といった50年代のアメリカで広く流通した白人男性と日本人女性との恋愛物語にも通じるようなステレオタイプ像に基づいて、セツコを捉える。このようにマンフレッドは、セツコに対して人種差別的な態度を示す一方で、従順でアメリカ人男性に尽くす女であり、性的欲望をかきたてる存在として、セツコを意識し、性的な嫌がらせもする。セツコを「戦争の囚人」(98)として、自分の家の寝室に監禁するのもそれを象徴する行為であろう。このようなマンフレッドのセツコへの振る舞いを通して、ヒューストンは、セクシズムと戦争システムが相互的因果関係にあることを提示する。

さらに、50年代のアメリカ社会における人種編成の構図も、セツコに対するマンフレッド夫妻の対応を通して示される。マンフレッドの妻フレディは、日本人花嫁を家に迎えることに異議を唱え、かつての敵国日本への嫌悪感を隠さない。また、アメリカの人種化作用に言及して、「これではじめてニグロが最下層でなくなる。ニグロのつぎにジャップを滑り込ませよう。ようやく私たちが誰かを踏みつけることができるようになる」(4)と述べ、アメリカの人種主義を内面化している自分自身の屈折した思いをセツコにつづけている。多様な人種の共生を目指す文化多元主義が50年代のアメリカ社会の統合理念とし

て提唱されながらも、貧困のために底辺であえぐ有色人種にとって、このような理念は、何の意味もなさなかったことがマンフレッド夫妻を通して知らされる。実際、多人種の共生を強調するクリードの主張をマンフレッドは「クレヨン箱」にたとえ、子供じみた「くだらない哲学」(11)だと一蹴する。50年代のアメリカにおいて、周縁化された有色人種は、人種差別という共通の経験を持ちながらも、有色人種間の相互理解を成立させる余裕もなく、それぞれのサヴァイヴァルに必死であったことが、セツコに対するマンフレッド夫妻の対応を通して示される。

以上のようにヒューストンは、1950年代のアメリカ社会におけるアフリカ系の置かれた社会的状況を背景に書き込みながら、アフリカ系兵士と結婚した戦争花嫁に対するアメリカ社会の偏見や排斥の背景にあったものを照射する。しかし、先述したように、セツコをアメリカ社会の戦争システムの犠牲者、もしくは悲劇のヒロインとして描くことだけがヒューストンの意図ではなかった。アメリカ社会の人種的、社会的境界を知らされながら、差別や偏見に抗して自分のホーム/場所を求める意志を持った主体として、ヒューストンはセツコを捉え、戦争花嫁に対する従来のネガティブなイメージに修正を試みようとしたからである。

日本の戦後の混乱や家父長制の束縛を逃れ、豊かで善意の人々が住む国として憧れと夢を抱いて、セツコはアメリカに希望を託してやってきた。しかし、クリードが自分たちの家を購入するために貯めていた資金をマンフレッドが使いこんでしまったことがわかり、セツコ夫妻のアメリカでのホームへの夢は一気に崩れ去る。またセツコは、軍の方針で極東からの戦争花嫁と結婚したアメリカ人兵士は住む場所も自由に選択できないことを知らされる。クリードは、故郷のニューヨークに住むことは認められず、アメリカ中西部のカンザス州の郊外にある特別地区に住むように軍によって命じられるのだ。セツコの要望もあり、クリードは、軍への異議申し立てをする。だが「ジャップと結婚したこと」は、「ニガー」としての社会的位置を二重に貶めるものであると軍は説明し、「日本人と結婚した仲間」と一緒に住むのが一番良いのだと述べて、クリードの要請を即座に却下する。クリードは、アフリカ系として軍隊内でも差別された上に、日本人女性と結婚したことで、アメリカで隔離された生活を強いられる。このような出来事を通して、セツコはアメリカにおけるアフリカ系や戦争花嫁の周縁性を知らされることになる。

しかしセツコは、日本人花嫁に対する偏見や排斥を知らされながらも、そこからの脱却を求め、アメリカに自分のホーム/場所を求める。例えば、マンフレッドの昔の恋人であるクレオールのアレクシスに対して、「なぜ、あなたは(白人との)混血なのにニグロとして通っているの？」(71)とセツコはたずねる。それに対してアレクシスは、「この世には、黒人と白人しかない。その他の人々には場所がない」(71)と語り、アメリカの人種編成が白人の人種的純粋性を軸に構築され、アレクシスのような混血が不可視化されるアメリカの人種化作用の現状を説明する。これに対してセツコは、「じゃ、場所を作りまし

よう」と述べて、周縁にとどまるのではなく、共に新たな場所を作りだそうとアレクシスに提案する。このようなセツコのナイーヴではあるがアメリカの現実に対抗しようとするひたむきさは、アレクシスのセツコへの評価を一変させる。アレクシスもセツコを日本人女性の典型として捉えていたが、次第にセツコは、チャイナ・ドールのような「よわよわしい小娘ではない」(74) ことを認めるようになるからだ。

同様にセツコは、最も辛辣な言葉を投げかけてきたフレディにも変化を与える。フレディは、セツコが妊娠していることを知らされると、「日本人も私たちと同じような子宮をもっているの？」(34) と問いかけ、セツコを当惑させる。また、「混血を生むのは良くない。戦争のことを皆が忘れてしまうまで待たう？」(34) と述べて、日本人花嫁との混血児は、パール・ハーバーの衝撃が根強く残るアメリカ社会においては、容認されない存在であることを知らせ、セツコに言葉の暴力を次々と浴びせる。しかしフレディは、セツコと従姉妹で同じように戦争花嫁であるフミコの二人をマンフレッドが寝室に監禁した時に、自分も含めて周囲の女性を奴隷のように働かせ、従属的な存在としてしか捉えていない夫を非難し、セツコに初めて同情を寄せるようになる。冒頭の場面で日本の国旗を破り捨て日本文化をかたくなに拒絶してきたフレディだったが、この場面の後では、セツコから贈られた日本のこけしを受け取り、セツコに心を開くようになる。

セツコとフレディの関係の変化は、セツコとアフリカ系のホームレスの若者ローレンスとの関係においても認められる。ローレンスも、当初はセツコに差別語を投げかけ、セツコを怒らせる。しかしローレンスは、「歴史からの逃亡者」(54) でしかない自分に必死に語りかけるセツコの優しさに次第にひかれるようになる。そして、土地を奪われたネイティヴ・アメリカンの強制移住や日系人の強制収容を例に挙げて、人種主義に基づいてマイノリティのホーム/場所を強制的に略奪してきたアメリカの歴史をセツコに語る。劇の最終幕でセツコといつものように話しこんでいたローレンスは、白人警官につかまり連れていかれる。その直後、クリードから誰と話していたかと問われて、セツコは一言、「アメリカ人」とつぶやく。この言葉には、ローレンスのようにアメリカにおいて排除され、周縁化された存在であってもアメリカ人なのであるとして、白人だけを真のアメリカ人として捉えてきたアメリカの長い人種主義の歴史に対するヒューストンの批判的な問いも示されている。

以上のように、セツコは、アメリカの厳しい現実を次々に知らされながら、自分を包囲する人種的、社会的境界を踏み越えようとする。自分が貯めていた頭金を車の購入にあてた弟を許す優しいクリードとともに、セツコはやや図式的に、かつ理想的に描かれている点は否めない。しかし、セツコのアメリカでの行く末の厳しさを暗示しながらも、ヒューストンは、マンフレッドらの偏見にひるむこともなく立ち向かったセツコを通して、周縁から境界線を揺さぶり、変化を促すことこそが「アメリカの夢」であることを示唆する。この戯曲のタイトルが *American Dreams* と複数形で書かれているのも、冷戦期のアメリカ

にやってきた戦争花嫁が、アメリカ社会で差異化されながらも「アメリカの夢」を信じて、アメリカ人になろうとした闘いの始まりを、ヒューストンはセツコを通して示そうとしたといえよう。

### 3. 境界線上の闘い

『ティー』は1960年代のカンザス州フォート・リレー基地のあるジャンクション・シティにおける日本人花嫁のコミュニティを舞台にして、チズエ、アツコ、セツコ、テルコ、ヒミコという5人の戦争花嫁を登場させ、彼女たちが日本茶を飲みながら、それぞれの思いを語り合う過程を戯曲化したものである。ヒミコは、18才の娘ミエコがレイプされて殺された後、絶望感から自殺した。劇ではヒミコは亡霊として舞台に登場し、夫を射殺したことや自分の過去を語り始める。ヒミコの家という舞台装置は変えずに、現実と黄泉の国の中間に漂うヒミコを軸に過去と現在が錯綜し、また、後に検討するダブル・キャストイングにより、それぞれが夫や子供を演じることで、戦争花嫁の歴史が重層的に語られる。

この劇でもヒューストンは、前作と同じように、従来の戦争花嫁をめぐる言説の修正を試みている。ヒューストンは、この劇を書く前に別のプロジェクトのためにジャンクション・シティに住む50人の戦争花嫁にインタビューをしたが、当初の予定を変更して、そのインタビューをもとに劇を書くことを決意したという。『ティー』では、5人の戦争花嫁の差異を浮かび上がらせることによって、ヒューストンは、戦争花嫁と呼ばれた日本人女性に対する従来の単一のイメージが作られたものでしかなかったことを明らかにする。5人は、日本での出身地や階層もそれぞれ異なっているにもかかわらず、「戦争花嫁」としてカテゴリー化され「日本が数えたいとも思わない不慮の災難」(Tea,181)として否定されてきた。日本では戦争花嫁は、家と祖国を捨てた異端者とみなされたからである。ヒミコも、日本で「売女」と呼ばれて、唾をはきかけられた経験を語り、スティグマ化された日本での過去を振り返る。また、アメリカにきてても戦争花嫁に対する差別を日常的に経験したことが、この劇でも語られている。ホテルの宿泊やレストランでの予約を断られ、買い物も許されなかった戦争花嫁は、「アメリカが運びたがらないお荷物」(181)でもあったのだ。<sup>4</sup>

さらに、戦争花嫁の歴史を複雑にしているのは、戦争花嫁間の差異である。戦争花嫁のコミュニティでは、人種と階層にもとづく差異があり、人種的、階層的境界線を越えた交流はほとんど見られなかったとされている。『ティー』でも、戦争花嫁間では、それぞれの夫の人種によって関係にも制約があったことが示されている。このような状況を最も明確に示すのが、二世の日系アメリカ人兵士と結婚したアツコである。アツコは、日本人としての純血を誇りとしているため、有色人種と結婚したセツコやチズエたちを差異化し、

自身の社会的優位を絶えず誇示する。例えば、セツコには、「ニグロは長生きしないよ。食べているものがね」(170)と述べて、夫を失ったセツコの孤独を顧みることもしない。また、メキシコ系兵士と結婚したチズエも、自分との交際を回避してきたアツコに対して、「私の夫がメキシコ人なので、家にも入れたくなかったのね」(184)と、アツコの差別的対応を批判する。アーヴィング・ゴフマンが、「スティグマのある人は、同類の人々を、そのスティグマが明瞭で目立つ程度に応じて差別化する傾向を示す」(ゴフマン、181)と述べているように、アツコの過剰な優越感や、有色人種の夫を持つセツコたちへの辛辣な皮肉は、アツコ自身がスティグマ化された存在であることを物語る。

実際、アツコは日系アメリカ人と結婚したことに誇りを抱いてはいるが、日系社会からは異端視されていることも、劇を通して示される。チズエは、「日系アメリカ人は、アメリカ人以上に私たちのことを嫌っているのよ。私たちはあの人たちになりたくないものを思い出させるから」(185)と述べて、日系アメリカ人と日本人とを同一視するアツコの誤りを指摘する。イヴリー・N・グレンは、戦争花嫁の結婚は、日系一世の結婚とは異なり、不安定で、破綻する場合も頻繁にみられたと指摘している(Glenn, 231)。日本の家族との絆も断たれた上に、異人種間結婚に対して否定的で戦争花嫁に対する偏見が強かった日系社会においても周縁化されていたため、アメリカの日本人戦争花嫁は、帰属できる共同体もなかったのである。

以上のような戦争花嫁の状況において、最も孤立感を深めていたのが、自殺したヒミコである。ヒミコは、「カンザスにきて、人生をズタズタにされてしまった。心が疲れきってしまった」(169)と告白して、夫殺しの背景にあったものを示唆する。ヒミコはアメリカにやってきて「人種差別以上のもの」(185)を経験した。日常的に経験する差別よりもまして、ヒミコを苦しめたのは、家庭内における白人の夫との闘いだった。ヒミコにとって、アメリカでのホームは安らぎの場ではなく、夫の差別的な振る舞いと抗争の場ではなかった。現にヒミコが夫に自分と結婚した理由を尋ねると、夫は、「上等なメイドをただで欲しかったからだ」(168)と答え、ヒミコは愕然とする。絶対的な服従を求める夫の横暴な態度や暴力から逃れるべく、セツコに救いを求めたヒミコは、「戦争はまだ終わっていないような感じがした」(173)と嘆き、「第二次大戦で死ねばよかった。戦争のほうがいまの戦いよりもずっと楽だった」(173)とすら述べる。この言葉は、ヒミコが夫との関係でも人種のおよびジェンダー的に二重に抑圧された存在でしかなく、夫との闘いを日常的に抱えていたことを雄弁に伝えている。リアドンは、戦争システムの下では、人種主義や性差別主義によって、人種的マイノリティや女性が内なる敵として他者化され、排除されると指摘している(リアドン、54)。ヒューストンは、ヒミコと夫との関係を通して、戦争システムとセクシズムの共犯性を示すとともに、戦争花嫁がアメリカで公的な領域のみならず、ホームという私的な領域においても、他者化されていたことを明らかにする。

このようなヒミコの内なる闘いとその挫折に、ヒューストンは悲劇性を認めつつも、夫の暴力的行為に抵抗を試みたヒミコの境界線上の闘いを通して、ヒミコに歴史的主体を認め、彼女の声を回復させている点を見逃すことはできないだろう。それは、ヒューストンが『ティー』において用いているダブル・キャストイングの方法によって示される。カレン・シマカワは、ジュリア・クリステヴァが『恐怖の権力——オブジェクション試論』において提示した概念である「棄却すべき、おぞましきもの」をもとに、『ティー』におけるヒミコの模倣的行為に注目する（Shimakawa, 101-110）。金髪のかつらをつけ、セクシーなドレスを着て白人女性の模倣をするヒミコの行為に、シマカワはヒューストンの「模倣の戦略」を見出す。いくら白人女性の模倣をしても、ヒミコの有色女性としての身体的アイデンティティは消去されることはなく、好奇心にさらされ、狂気じみたものとして映るだけである。ヒミコの模倣は、シマカワが説明したように、アジア系女性をステレオタイプ化し、「おぞましきもの」として排斥してきたものが白人優位のアメリカ文化であったことを示唆する。

5人の戦争花嫁が、それぞれの夫や子供の特徴を模倣する場面を劇の後半に取り入れることで、ヒューストンは、アメリカの主流文化を批判的に捉えなおそうとする。例えば、テルコは、娘に扮して演技をしながら、白人の夫にまるで奴隷のようにつかえる自分を揶揄している娘の気持ちを代弁することによって、自分を対象化する。また、夫のウィリアムに扮したヒミコの模倣は、ヒミコが夫の暴力の根にあるものを察知していたことを示す。「黄色い肌と細い眼」（191）のジャップと結婚した自分にとって、ヒミコは「俺が手に入れた唯一の賞品だ」（191）という。そして、セツコの夫から「何を奥さんに期待していたのか？」と聞かれると、ウィリアムは、「奴は、愛をねだる孤児のように、俺のげんこつのほうにすり寄ってくる。すると俺のげんこつが磁石のようにおりてくるというわけだ」（190）と答え、戦争花嫁を自分の所有物あるいは戦利品としてしか捉えていない白人男性の本音が暴露されるのだ。ジー・ヨン・ユーが指摘したとおり、白人兵士は戦争花嫁に対して、アメリカ文化に同化することを求めつつも、一方で伝統的なアジア女性にとどまるように求めていることは、ヒミコに対する夫の暴力や高圧的な態度からも明らかである（Yuh, 107）。夫の抑圧のもとで葛藤を深めていたヒミコは、家庭内においても「戦争花嫁」という二重に抑圧された存在でしかなかったのだ。

以上のように、ヒューストンは、戦争花嫁の「批判的模倣」を通して、それぞれが抑圧してきた声を回復させる。そして、戦争システムにより、客体化されてきた戦争花嫁を歴史的主体として語らせる場面を通して、ヒューストンは、戦争花嫁の異質性、多様性を明らかにした。5人の戦争花嫁は、相互の声に耳を傾け、対話することで、相互の絆を感じ、ともにお茶を飲むことの意味を知らされる。英語が最も達者でアメリカ社会への同化志向を最も強くもつチズエは、コーヒー好きで、最初は日本のお茶を飲むことに興味を示さず、「お茶はただの飲み物だわ」（171）と言い放つ。しかし、日本のお茶の好みもそれ



ぞれ異なる女性たちは、これまでの経験や現在を語りあうことで、お茶は、「すべてにバランスをもたらす」(171) ものであり、「自分たちを一つにまとめる奇跡のようなもの」(195) であることを再発見して、相互の差異を乗り越えて、応答しあう関係を築くことをお茶が可能にしてくれたことを認識するのだ。それまでお互いに心を打ち明けて語ることもなかった戦争花嫁たちは、「語りえぬもの」として秘めてきた思いを聴き、共感する存在を相互に見出すことで、未来につながる希望を得ることができた。生と死の中間地帯で漂う亡霊として登場していたヒミコが、最後に「戦争は終わった」(198) と述べて、黄泉の国に旅たつのも、闇の奥に封じ込められていた記憶をよみがえらせ、奪われていた声を回復させることで、ようやく彼女自身の内なる闘いから解放されたからである。

#### 4. アメリカの未来に向けて

ヒューストンによる二つの「戦争花嫁」劇は、太平洋戦争が生み出した戦争花嫁という特別な歴史を振り返るだけではなく、戦争システムの複合的な構造を明らかにするとともに、人種的、社会的境界の変化を促す、アメリカの未来に向けた劇として書かれたものであったことを、これまでの検討を通じて確認することができるだろう。マリア・P.P. ルートは、アメリカにおいて人種の定義は、「純粋な人種」という概念をもとに構築されてきた長い歴史があると述べ、人種に対立するのは、人種の無化ではなく、「不純な人種」としてのハイブリディティの存在であったと指摘している (Root, 31)。混血は、「病的なもの」あるいは、「おぞましい交わりの象徴」として捉えられてきたからである。しかし、今後のアメリカで、ますます進むといわれている人種の混淆化を考えると、ヒューストンの最も挑戦的な点は、小林富久子が指摘したように時代に先駆けて「純血主義に風穴をあけるものとして「混血」や「雑種化」の概念を提示している」点に認めることができる (小林, 151)。ヒューストンは、二つの劇を通して、人種的、文化的越境には困難が伴うものであり、ヒミコのように破滅を招くものでもあることを示唆する一方で、自身のように多人種的、多文化的な存在であるアメレージアンにアメリカ社会に変化をもたらしうる可能性を見出そうとしている。現に『ティー』で、セツコは自分の娘に言及して「わたしは新しいものを生み出した。新しい見方ができて新しい考え方ができる何かを」(187) と述べて、アメレージアンである自分の子供にアメリカの未来への希望を託していることが示されている。戦争花嫁たちの記憶を語り直すことは、ヒューストンにとって、過去を問い直すとともに、アメリカの現在、さらには、未来に向けて語る行為でもあったのである。

ヒューストンは、従来のアジア系アメリカ文化研究において、アメリカとアジアとの戦争がアジア系に与えた人種的、文化的、心理的影響を検討する際に、アメレージアンの存在が見逃されてきたことを指摘する (Houston, 1991, 53)。その背景には、他人種との混血

を否定的に捉えていたアジア系コミュニティの長い歴史がある。特にアフリカ系の血をひくアメレージアンに対しては、「見た目がアジア的ではない」ということで、偏見が根強く残っているとヒューストンは書いている。このような状況に対抗して、ヒューストンは現在もなおアメリカとアジアとの戦争をアメレージアンというマージナルな位置から語り直す試みを続けている。「アジア系アメリカの過去と未来は、アメレージアンにおいて融合する」(Houston,1991,56)とするヒューストンの未来志向の記憶に基づいて書かれた二つの劇が示すように、ヒューストンの試みは、今後のアジア系アメリカ文化研究の枠組みそのものを変えていく可能性を秘めたものとして期待されるだろう。

本稿は、平成 20 年度—22 年度科学研究補助金（基盤研究 C）（課題番号 20520254）による成果の一部である。

#### 〈注〉

- 1 戦争花嫁の歴史については、以下を参照。 Yukiko Koshiro, *Trans-Pacific Racisms and the U.S. Occupation of Japan* (New York: Columbia UP, 1991), Evelyn Glenn Nakano, *Issei, Nisei, War Bride: Three Generations of Japanese American Women in Domestic Service* (Philadelphia: Temple UP, 1986). Teresa Williams, "Marriage between Japanese Women and U.S. Servicemen since World War II." *Amerasia Journal*. 17:1 (1991),135-154. 島田法子編、『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道——女性移民史の発掘』明石書店、2009。また戦争花嫁をめぐる言説についての最近の研究としては、1950 年代後半のアメリカのメディアで表象された戦争花嫁像にモデル・マイノリティ言説の萌芽を見出す示唆に富む論考として、Caroline Chung Simpson, *An Absent Presence: Japanese Americans in Postwar American Culture, 1945-1960* (Durham: Duke UP, 2001)がある。
- 2 リアドンは、「戦争システム」を「権威主義の原則を基盤とし、人間の間に不平等な価値があることを仮定し、強制的な力によって支えられている私たちの競争的社会秩序の意味」として定義し、「構造的なもののから個人間に至るまで社会のあらゆる点に影響を及ぼしている」と説明している（22-23）。
- 3 「記憶の未来化」についてヨネヤマは、以下においても詳細に論じている。  
Lisa Yoneyama, *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory* (Berkeley: U of California P, 1999), 26-33.
- 4 戦争花嫁に対するアメリカ社会の偏見は、戦争花嫁が受けた選考テストでの質問の数々をヒミコが思い出す場面でも示される。ヒミコによると、選考テストでの質問は、戦争花嫁への偏見に基づくものであったという。たとえば「今、あなたは売春婦をしていますか。または、これまでにやっていたか」(166) などと聞かれ、戦争に疲れたアメリカ人兵士を癒す「夜の女」として捉えていた戦後期の戦争花嫁に対する否定的なイメージ (Simpson, 171) が根強いものであったことが示されている。

#### 〈引用文献〉

- ゴッフマン、アーヴィング 石黒毅訳、『スティグマの社会学 烙印を押されたアイデンティティ』（せりか書房、2001）
- Houston, Velina Hasu. *American Dreams*. Electric Edition by Alexander Street P,2009.
- , *Asa Ga Kimashita*. In *The Politics of Life: Four Plays by Asian American Women*. Philadelphia: Temple UP, 1993.

- , *Tea* In Roberta Uno, ed., *Unbroken Thread: An Anthology of Plays by Asian American Women*. Amherst: The U of Massachusetts P, 1993. 155-200.
- . "No Passing Zone: The Artistic and Discursive Voices of Asian-descent Multiracials." *Amerasia Journal*. 23:1(1997). vii-xii.
- . "The Past Meets the Future: A Cultural Essay." *Amerasia Journal*. 17:1(1991):53-56.
- Glenn, Evelyn Nakano. *Issei, Nisei, War Bride: Three Generations of Japanese American Women in Domestic Service*. Philadelphia: Temple UP, 1986.
- 小林富久子『アメリカ女性作家——周縁から境界へ』学藝書林、2006.
- リアドン、ベティ 山下史訳 『性差別主義と戦争システム』勁草書房、1988.
- Koshiro, Yukiko. *Trans-Pacific Racisms and the U. S. Occupation of Japan*. New York: Columbia UP, 1999.
- Root, Maria P.P. "Multiracial Asians: Models of Ethnic Identity." *Amerasia Journal* 23:1,1997. 29-42.
- Simpson, Caroline Chung. *An Absent Presence: Japanese Americans in Postwar American Culture, 1945-1960*. Durham: Duke UP, 2001.
- Shimakawa, Karen. *National Abjection: The Asian American Body Onstage*. Durham: Duke UP, 2002.
- Spickard, Paul R. *Mixed Blood: Inter marriage and Ethnic Identity in Twentieth-Century America*. Madison: The U of Wisconsin P, 1989.
- ヨネヤマ、リサ 「記憶の未来化について」小森陽一、高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、1998 年。
- Yuh, Ji-Yeon. *Beyond the Shadow of Camptown. Korean Military Brides in America*. New York: New York UP, 2002.
- Williams, Teresa K. "Marriage between Japanese Women and U.S. Servicemen since World War II." *Amerasia Journal*. 17:1 (1991),135-154.

## Velina Hasu Houston's “Future-Oriented Interrogations of the Past” in *American Dreams* and *Tea*

Taeko Inagi Hiraishi

America's wars in Asia have provided the theme of “memory” for a striking proportion of Asian American literary works since memory became a primary concern in many disciplines of Asian American Studies. Nora Okja Keller's *Comfort Woman* and Andrew Pham's *Catfish and Mandala* (2000) are good examples. They focus on recovering long-suppressed memories of past wars in Asia and demonstrate that U.S. wars in Asia continue to have a profound impact on contemporary Asian Americans.

Velina Hasu Houston, the daughter of a Japanese mother and a half-native American and a half-African American father, is regarded as one of the pioneers who reclaim untold stories of the first U.S. war in Asia. She chronicles her mother's life as a Japanese military wife in her plays entitled *American Dreams* (1984) and *Tea* (1987). She has been highly evaluated as a result of her challenge to the negative stereotypes of Japanese military wives, whose history has been marginalized and often erased in official version of U.S. history.

Houston claims that her motivation for re-narrating the history of Japanese war brides was not only personal but also political. Based on her own mother's memories, the two plays reveal the plight of Japanese war brides in postwar America by depicting the complex links between racism/sexism and the Asia-Pacific War. In the two plays, Houston finally suggests that there is a possibility for the Japanese war brides to be liberated from their positions as racial and gender subaltern. This paper examines Houston's politics by analyzing her idea of “future-oriented interrogations of the past” as depicted in those two plays.